平成 26 年度　大学生の力を活用した集落復興支援事業　調査研究報告書

福島県二本松市木幡地区水舟集落の地域活性化策について

宇都宮大学 里計画研究会

2015 年 2 月

目次

Ⅰ　研究会の概要……　1

Ⅱ　水舟集落の概要……　2

Ⅲ．2013 年度活動の振り返り……　3

Ⅳ．2014 年度活動結果……　4

1. 農家民泊ガイドラインの作成
2. 農家民泊（8 月）について
3. 農家民泊感想報告会
4. 農村活性化についての講演会
5. グラウンドゴルフ大会、バーベキュー
6. 集落のフィールド調査
7. 農家民泊（12 月）・農家生活体験について
8. ワークショップについて
9. 芋煮会（交流会）について
10. まとめ

Ⅴ．活性化策の提案……　11

1. 住民の集まる機会（意識共有）
2. 農家民泊実施・一般参加者受入の検討
3. 看板・パンフレット制作
4. 都市農村交流プログラム検討
5. 大学祭への参加
6. グリーン・ツーリズムの先進事例見学

謝辞

Ⅰ　研究会の概要

私たち「宇都宮大学里計画研究会」は宇都宮大学建築計画研究室に所属する学生９名により構成されている（表１）。私たちが所属する研究室では、従来から主に中山間地域を対象にした住民参加型の地域コミュニティに関する計画策定を手がけてきており、東日本大震災後は岩手県三陸漁村被災地の復興支援にも携わっている。産業停滞と少子高齢化に悩み、加えて震災の影響が大きい福島県下の過疎・中山間地域に対していくばくかの支援ができればと考え参加させていただいた。

表１．宇都宮大学里計画研究会構成員

サークル名	宇都宮大学里計画研究会
学生代表	
構成員	

Ⅱ　水舟集落の概要

我々宇都宮大学里計画研究会が今年度活動をおこなった福島県二本松市木幡地区水舟集落（以下、水舟集落と称する）の概要を記載する。

水舟集落は、福島県の中通り北部に位置し、県都福島市と中核都市郡山市との中間に位置する福島県二本松市木幡地区に属する（図１）。水舟集落は 4 つの行政区からなる集落であり、人口は 104、世帯数は 34 世帯の小規模な集落である。

次に主な産業についてみると、アンケートにて職業を農家と回答した世帯は 33 世帯中 14 世帯（42.4％）であり主な産業は農業である事が分かる。また、主な作物は、稲、エゴマ、ツルムラサキ、大豆、エンドウなどである。

図 1. 水舟集落の位置

Ⅲ.2013 年度活動の振り返り

我々宇都宮大学里計画研究会が昨年度福島県の「大学生の力を活用した集落復興支援事業」を受け,おこなった活動は表２の通りである。

表 2.2013 年度活動スケジュール

日付	内容
2013 年 8 月 23～24 日	・集落代表と調査打ち合わせ ・住民へのヒアリング調査 ・集落のフィールド調査
2013 年 10 月	15 日　住民へのアンケート配布 22 日　アンケート回収 （回答数:103/104 人　33/34 世帯）
2013 年 11 月 2～3 日	・住民へのアンケート結果報告会 （ワークショップ、住民交流会） ・集落のフィールド調査
2014 年 1 月 31 日～2 月 1 日	・住民への年間活動報告 ・地域づくりオープンカフェでの発表

活動を通して明らかになった課題や魅力についてまとめる。集落の課題として、集落全体の集まりは基本的に行われておらず、集落への意識の低下や住民間の関係の希薄化が進む現状、20代の若い世代の割合が多いながらも集落への意識が低い、少子高齢化や高齢者のみ世帯の高い割合、風評被害などから起こる農業の衰退、拠点施設の老朽化が挙げられた。一方、集落という小さい範囲内に、様々な農業風景や見晴らしのいいスポットなどが点在し様々な自然の表情に出会える環境。また、おいしい食材が集落の魅力として挙げられる。

以上の事から、「集落全体で集まる場所や機会を作り集落に対する意識向上を図る」「地域資源を活かし、観光客を呼び込む新たな産業を生む」事が必要であると考える。

そこで今年度は、集落に対する意識向上、ひいては活性化を目的とし、集落全体で集まる場所の整備やグラウンドゴルフ等を用いた活動機会など、地域資源を活かした散策マップの整備や農家民宿などを実施した。

Ⅳ. 2014 年度活動結果

我々宇都宮大学里研究会が今年度福島県の大学生の力を活用した集落復興支援事業を受けおこなった活動は表３の通りである。

表３． 2014 年度活動スケジュール

日付	内容
2014 年　～8 月	・農家民泊ガイドラインの作成
2014 年 8 月 23～24 日	・農家民泊、感想報告会 ・農村についての講演会 ・グラウンドゴルフ大会、バーベキュー ・集落のフィールド調査
2014 年 12 月 6～7 日	・農家民泊、農家生活体験 ・ワークショップ ・芋煮会
2014 年 12 月 20 日	・地域づくりオープンカフェでの発表

1. 農家民泊ガイドラインの作成（図 2）

2014 年 8 月 23～24 日に行う農家民泊体験に向けて、県外の農家民泊実施先進事例を調査し、農家民泊ガイドラインを作成した。

ガイドラインの内容としては、農家民泊のメリットや受入世帯がすることについてなどについて記載した。事前に農家民泊に対する理解を深めることで、当日の農家民泊を行いやすい環境を整えた。

図 2. 農家民泊ガイドライン

2. 農家民泊（8 月）について（写真 1）

2014 年 8 月 23～24 日の期間において農家民泊体験を行った。3 軒の農家で民泊を実施し、合計 6 人の学生が宿泊した。食事は、各農家が自分の畑で育てた農作物を中心とした料理を提供した。また、学生たちは収穫作業を手伝うなどして農家の生活・仕事に触れた。

写真 1. 農家民泊の様子

3. 農家民泊感想報告会（写真 2）

農家民泊への意見・感想、今後の活性化に向けての話し合いを行った。実際に農家民泊を行うことによって農家民泊に対する意識に変化が見られた。（表 4）

写真 2. 農家民泊感想報告会

表 4. 農家民泊を終えての感想

実施世帯の声	実施前	・知らない人を家入れることに抵抗があった ・料理が口に合うかという不安があった　など
	実施後	・いつも通りの過ごし方で大丈夫だと思った ・料理を喜んでもらえてうれしかった ・集落外の人と話ができてよかった ・孫のように接することが出来て楽しかった ・交流時間が足らない　など
未実施世帯の声		・泊まらせる条件が整えられればやってみたい など
参加学生の声		・自家栽培で作った料理がおいしい ・「集落の人の日常」を新鮮に感じた ・家族ができたようで楽しかった ・交流時間がもっとほしい　など

4.　農村活性化についての講演会（写真 3）

農村活性化についての講演会を行った。日本における農村が持つ可能性や、県外で行われている農家民泊の先進事例を紹介し、農村活性化の必要性や農家民泊への理解をさらに深める場を設けた。

写真 3.　農村についての講演会

5.　グラウンドゴルフ大会、バーベキュー（写真 4）

2013 年度の活動から、集落全体で集まる場所や機会を作る必要があると分かったため、グラウンドゴルフ大会とバーベキューを実施し、地域住民の交流の場が増えるきっかけづくりを設けた。

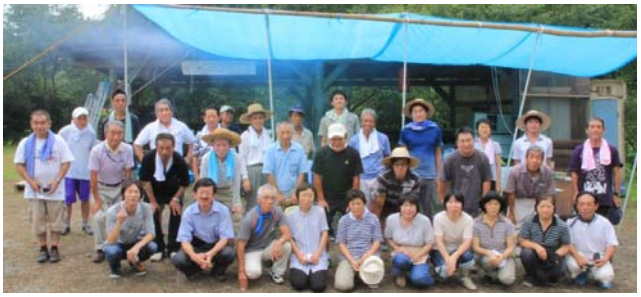

写真 4.　地域住民の交流の場

6.　集落のフィールド調査（写真 5）

集落内にある豊かな自然風景の中でも、特に特徴的であり地域内に多く見られた巨石について、フィールド調査を行い、どこにどのような巨石があるのかを分かるよう巨石散策 MAP を作成した。集落外の人を呼び込める地域資源として活用し、発展させていくための準備を行った。

写真 5.　地域内に見られる巨石

7. 農家民泊（12 月）・農家生活体験について

今回の農家民泊は、8 月の農家民泊実施後に住民や学生から出された感想・意見を基に、実施世帯数を 3 世帯から 5 世帯に増やし、女性や留学生も交えて行った。また今回は住民の方から集落外の人と交流をしたいという要望もあり、農家生活体験（野菜収穫・加工、薪割り）を行い集落外の人との交流の場を設けた。前回と同様に民泊実施前と実施後に実施世帯から意見や感想を出してもらったところ、2 回目実施世帯では民泊に対する抵抗は少なくなっており、女性や外国人の受け入れについても前向きな感想を聞くことができた。（表 5）

写真 6. 農家民泊の様子

写真 7. 野菜収穫

表 5. 農家民泊を終えての感想

実施前	外国人が一人で来たら心配だった 料理が口に合うかという不安があった（初実施世帯） 前回があったから、あまり抵抗はなかった（2 回目実施世帯）
実施後	やってみたら普通に泊めるだけで家族の帰郷と変わらなかった（初実施世帯） 集落外の人や外国人が野菜をおいしいと言ってくれて嬉しかった 集落外の人と交流ができてよかった（全世帯） 女の子が来てくれて、おばあちゃんの話し相手ができてよかった

8. ワークショップについて

今回のワークショップには集落住民２２名（21.4%）が参加した。11 人 1 チームとし 2 チームに分かれて、地域資源掘り起こし（地域資源カレンダーづくり）と集落の理想の姿について話し合った。今回のワークショップでは地域資源の活用方法の検討と住民間の問題や意識の共有をねらいとして行い、1. 集落への想い　2. 地域資源カレンダーづくり　3. 集落の目標を考える　4. まとめ　というプログラムに沿って話し合いが進められた。

写真 8　ワークショップの様子

8-1. 集落への想い

目標（こんな風になってほしい） と現状（困っていることなど）について話してもらい、現状の把握と活性化に向けて糸口を探した。現状では子供や若者が少ないという意見が最も多く、目標では集落のみんなが集まる機会がほしいという意見が多く挙げられた。（表 6）

表 6. 集落への想い

現状	子供・若者がいない（後継ぎがいない等） （6 名） 交通が不便（道が狭い、病院が遠い、バスが来ない等）（2 名） 健康などに不安がある （2 名）
目標	みんなが集まる機会がほしい （４名） みんなが前向きな気持ちになってほしい （2 名） 花を植えたい（毘沙門堂） （2 名） 活気のある集落にしたい （2 名） 産業を活性化したい （2 名） 集落外から人が来てほしい（若者・外国人） （2 名）

8-2. 地域資源カレンダー

地域の年間資源を掘り起こし、集落の魅力を住民同士で共有した。チーム①では「食べる」の項目が、チーム②では「体験する」の項目で地域資源の数が多くなった。その内容は共に各家庭で作られる季節の作物（ニンジン、タラノメ、ツルムラサキ、サトイモなど）が多く挙げられた。また、通年では毘沙門堂や稲荷神社などの集落文化遺産についてが多く挙げられた。（図 3）

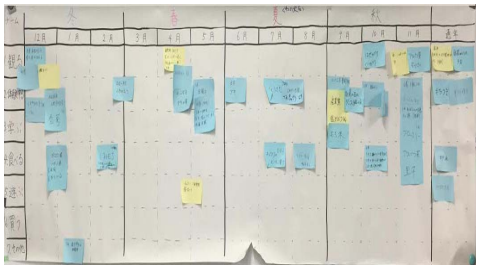

写真 9. 年間地域資源カレンダー

	冬			春			夏			秋			通年
チーム①	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
観る	1				1					1	1		5
体験する	1								2		2		
学ぶ			1									2	3
食べる	4			1	1	2	1	1	5	3	1		
遊ぶ											1		3
買う													
その他													1

	冬			春			夏			秋			通年
チーム②	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	
観る	3			1	1						3	1	2
体験する	2		2		1	2	1	3		5	2	7	2
学ぶ													
食べる	2	1	1					1	1		1		1
遊ぶ					2								1
買う													
その他		1											

数字：地域資源の数

図 3. 年間地域資源カレンダーまとめ

8-3. 集落の目標を考える

各チームごとに地域の資源を活用して、理想の集落に近づける方法や、問題を解決する方法を考えた。

チーム①では、住民同士の集まりに参加する人が少ないという現状に対して、住民みんなが参加できるような場をつくるという目標を立て、住民同士の集まる場や集落のシンボルづくりなどに焦点を当てた提案が出された。(図 4)

チーム②では、若い人が家を離れていて集まれる機会があまりないという現状に対して、住民同士や集落外の人が集まれるような集落にしたいという目標を立て、集落外の人を呼び込むための地域資源の活用方法に焦点を当てた提案が出された。(図 5)

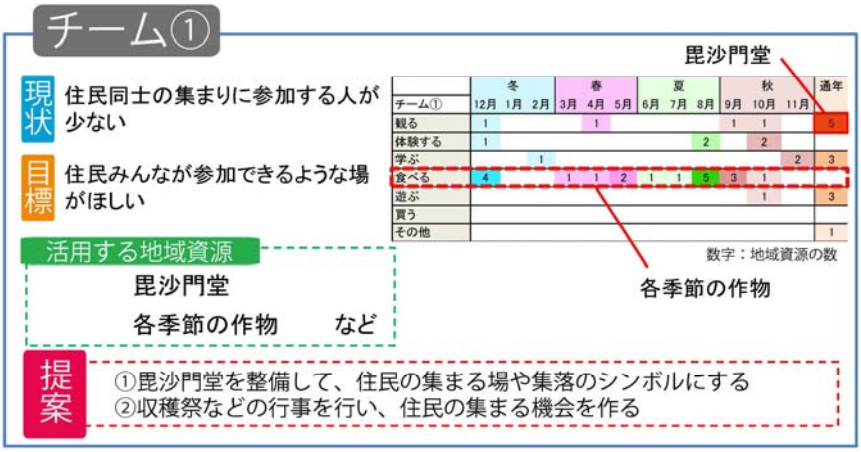

図 4. 提案のまとめ（チーム①）

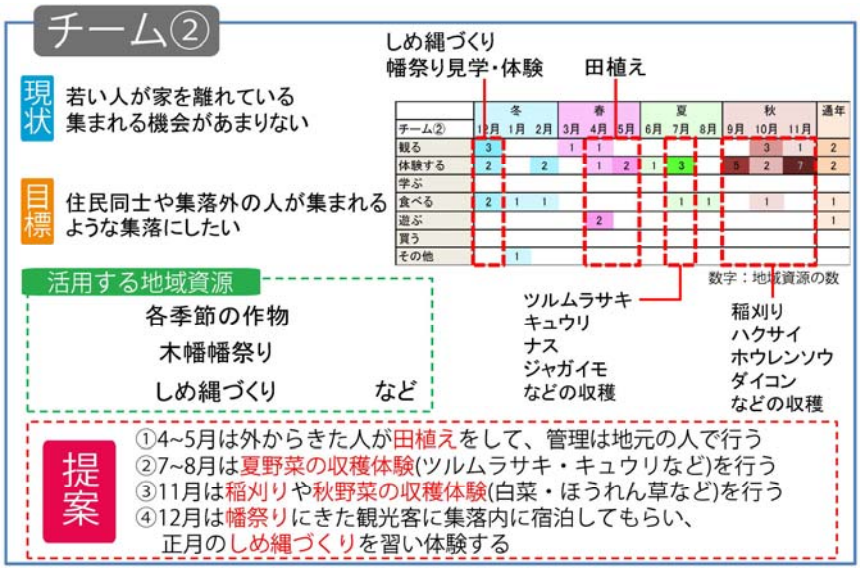

図 5. 提案のまとめ（チーム②）

8-4. ワークショップまとめ

今回のワークショップを通して、住民同士の集落に対する想いや問題意識を共有することができた。また、地域資源を活用して今後の活性化へ向けた具体的な提案がされ、住民の活性化への意識に変化がみられた。

9. 芋煮会（交流会）について

ワークショップ後に、住民同士が集まり学生らと交流し、今回の調査の感想などを話す場として芋煮会が行われた。住民たちが集まることで、地域としての連帯感を深めることができた。また、学生らと農家民泊や地元のことなどを話し、地域への自信につなげることができた。今後も活性化に向けての活動を行いたいという声も聞かれ、住民たちの活性化への意欲の向上が見られた。

写真 10. 芋煮会の様子

10. まとめ

フィールド調査やワークショップから集落内にある多くの地域資源見つけることが出来、今後の活用を検討することが出来た。またグランドゴルフ大会、バーベキューや芋煮会など、住民同士の交流の場を設けることで、住民の集落に対する意識が向上し、農家民泊や農家生活体験を行うことで、民泊に対する意識に変化が生まれ、集落外の人と触れ合うことにより自信が持てるようになった。昨年度と比べ住民から率先して参加するようになり、前向きな意見が多く出るようになった。

以上のことから、集落が自立し、集落外の人たちと関わることで活気のある集落になるために今後も住民の集まる機会をつくり、地域資源を活用した長期的な活動を続ける必要がある。

Ⅴ．活性化策の提案

「Ⅳ．2015 年度活動結果」から、

① 住民の集まる機会（意識共有）

② 農家民泊実施・一般参加者受入の検討

③ 看板・パンフレット制作

④ 都市農村交流プログラム検討

⑤ 大学祭への参加

⑥ グリーン・ツーリズムの先進事例見学

の 6 つの活性化策を提案する。

1. 住民の集まる機会（意識共有）

今年度以上に、来年度においては集落の住民が集まることのできる場を設ける．継続的に行うことで集落内での認知度が高まり、多くの住民参加が期待できる。また、来年度行う予定である②～⑥の事業に関しての意見提案・交換も行うことが出来、ひとつの共同体として集落の結束力が高まる。

2. 農家民泊実施・一般参加者受入の検討

今後、事業としての補助なしで民泊を行うことが出来るように、一般参加者の宿泊に慣れる必要がある。そこで、来年度は宿泊者を今まで行ってきた学生のみならず、一般参加者を含め行う。一般宿泊者を含めた農家民泊にすることで、実践的な農家民泊に対する住民の意識の変化を改めて調査する。

3. 看板・パンフレット制作

フィールド調査から作成した散策マップを活かすため、散策マップの看板づくりやパンフレットを作成する。作成後、実際に一般参加者や住民に散策してもらうことで、一般参加者は地域の魅力を体験することが出来、住民は地域資源の魅力を再確認することが出来る。

4. 都市農村交流プログラム検討

地域資源（各季節で収穫できる作物など）を集落外の人に、収穫体験や加工体験などをしてもらう。収穫を行うための畑は、耕作放棄地を利用することで、集落内の農業の活性化にもつながる。

5. 大学祭への参加

宇都宮大学の大学祭にて出店し、集落で採れた農産物（加工品）などの調理・販売を行う。今まで行ってきた集落内での活動とは異なり、集落の人たちが大学という若者がたくさんいる場所で、自家栽培・調理したものを振舞い、触れ合うことが出来る。多くの若者に集落の農産物を味わってもらい、風評被害を払拭するきっかけにもなる。集落の活動拠点を都市側にも設けることで、都市と農村の相互における交流を実現できる。

6. グリーン・ツーリズムの先進事例見学

集落住民に向けたグリーン・ツーリズム先進事例の見学会を行う。すでに実績のある農村集落が行っている活動内容を体験することで、自身の集落における活動内容立案をより具体的なものにすることが出来る。当事者でなければ分からない運営等の疑問点も、集落間で継続的な関係をもつ事でよりスムーズに本集落においてのグリーン・ツーリズム整備を行うことが可能になる。

以上のように、活性化策の提案は、集落住民自身による実践を、より一層推進することを念頭に置いた活動内容とした。

謝辞

２年間の調査にあたり、村松義正区長をはじめとする、水舟集落の皆様には、調査へのご協力だけでなく、芋煮会の実施等していただきまして本当にありがとうございました。深く感謝いたします。また、福島県企画調整部地域振興課の戸倉様、二本松市総務部企画財政課の朝倉様および尾形様をはじめとする、福島県、二本松市の職員のみなさまにも、活動を行うにあたり、様々な形で支援していただきました。本当にありがとうございました。末尾になりますが、この場を借りてお礼申し上げます。